
ネギま！～白面で白毛な九尾～

tick

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！〜白面で白毛な九尾〜

【Nコード】

N5833S

【作者名】

tick

【あらすじ】

ある男子学生が、ひよんな事からネギま！の世界へ。

そんな、彼の事を描いた物語り。 資格資格などでリアルが忙しいので更新はかなり遅れます！今のところ危険物取扱者の資格がとれしだたいアップしていきたいと思いますので今後ともよろしく願います！

？第一時限目（前書き）

やっちまった…

だが後悔はしていない！！

感想や批評は随時募集しています。駄文ですが、よろしく願います。

？第一時限目

周りが暗くなり始めた夜の7時ごろ、俺は高校からの帰り道を2人で帰宅していた。

「なあーネギまって面白いよな!!」

「やっとわかってきたか、とくにあそことか…… e t c」

こんな、アニメなどに関する会話は途切れる事なく、30分はゆうに過ぎていた。

わかつているとつりに俺達はオタクという部類に入っている。

特に気にはしないが。

ちなみに、俺が一番楽しみにしている事は親友とこうやって、オタ話に華？を咲かせることだ。

「なあーネギまの世界に行く、行けるとしたらどんな能力が欲しい？」

いつもの話題ではないか。

「ん？そうだな……俺は願いとしては5つあるかな」

こう言うことは漫画や二次創作作品などを読んで何度も考えた事がある。

そうやって考えている時間とても楽しいからな。

さてと、おれは、

「白面白毛九尾になることかな？」

「ほほう、白面金毛九尾ではないのかね？」

おいおい、なんでいきなり口調がなにかを悟ったじいさんのようになるんだよ。

まあいいけど。

「だって、俺は九尾好きじゃん！」

そうなのだ、俺はどんな幻獣や妖怪などよりも九尾が一番大好きなんだ！

まず、尻尾だよな！自分でモフモフしたい！

ほかに、色々あるがはしょって、全てが好きだ。

白面金毛九尾ではないのは、金よりもただ白が好きただけだが。

「ふむふむ、確かにお主は、らニしゃまー！！とさけんで……ブベシ！？」

ん？なにが…

「ん？なにが…的な顔するなよ！！お前が打ったんだろうが」

「あーまち！すまん、無意識だったわ」

おっと、手が無意識に出ていたのか。

いやゝ無意識は怖いね。

「てか、前々から思っているがその癖直せよ！！」

「無理だわ！」

キラーン！！と犬歯を光らせ、1000%の笑顔でいいはなつ。

というより、無意識をどう直せと！

「まあ、気を付けるよ」

「ああ」

「さて、お前はどんな能力が欲しいんだ？」

俺だけ答えるのも不公平だろうと思い、質問を返してみる。

すると、親友は待ってました！！とばかりに顔をニヤリとさせ、ニヒルな笑いを浮かべて。

「俺は、透視能力で……グヘヘ……」

バゴーン！！

ん？また音が……

というか、変態だなあいつ！何時ものことだが、キモいな。

音源の方に顔を向けると、親友がコンクリートの壁にめり込んでいた。

「おい、大丈夫か！？」

駆け寄り、コンクリートの壁から親友を引き剥がす。

死んでないよな……

「ぬあー！！」

「うわっ！？」

引き剥がした途端に、大声で叫びだした。

「どうしたんだよ!」

よくみると、目に涙が見え隠れしている。

「またお前が無意識で俺を、思い切り蹴ったんだよ!」

「なっ!？」

足の違和感は蹴ったからだったのか!? 無意識恐ろしい子!!

「だから、直せよ!! その無意識!」

「直せよ!と言われましても、無意識なものでして……」

無意識を意識するって矛盾してるよね。

「お前なんか……」

「お前なんか?」

なにがでる!!

「お前なんか! 八雲紫様にスキマ送りにされて、異世界に飛ばされる!!」

うわーん!!

擬音語をつけるとしたらその言葉が相応しく、走って遠くまで行ってしまった。

「ゆかりんは幻想入りだろ？しかし、その発想は新しいぜ！」

などと、愉快に親友の背中にグッジョブを送っているやつがいた。

「さて……帰るか」

トコトコと歩きだす。

――。

さて、親友と別れて帰っていた俺だが目の前に凄く興味のそそられるものがある。

一般人だつたらそこまで興味をそそられることはないと思うが（道の真ん中にこんなものがあつたら、一般人、人種、種族問わずんごく興味を持ちます。）俺には凄く興味がそそられる。

ええ、大事なことなので二回いいました。

フッフッフ……

それはなにかって？

それは…

道の真ん中にポツツリと たたずむ？人が通れそうぐらいの、『スキマ』があるのだ！！

ハッハッハ！！ゆかりんめ、ついに俺を幻想入りさせる気だな！

「ゆかりん！その挑戦、承けてたとうー！！」

俺は『スキマ』に飛び込んだ。

あれ？『スキマ』に目つてあつたよね……

目の無い『スキマ』に飛び込んだバカな男がいたのであつた。

どちら様の『スキマ』で？

その声は誰にも届かなかつた。

？第二時限目（前書き）

今回も作者の妄想成分が爆発しております。

ああ…やっちゃった…

主人公の名前だすはずだったのに！！

こんな作者の駄文に感想、指摘とつありましたら送って下さい！

？第二時限目

ある森の中から空を見上げて見る。

その空は、雲一つもなく気持ちの良いほど晴れていて、おてんと様がギラギラと森の生い茂っている木々に成長の日をあてている。

そんな空に黒い点がポツンといきなり現れた、最初はとても小さかったそれは地面にちかづくにつれ少しずつ大きくなりやがては人の形に収まった。

その人の形のは、形がはつきりとわかるように目視できるようになったと思ったらもの凄いスピードを出して地面にぶつかった

……

チュドーン！！

半径数十メートルもの巨大なクレーターができたのは追記しておこう。

――。

ゴオオ！！

お、スキマを抜けましたね！

ふう、ろくに確認もしないで変なスキマに入るものではないですかね。

ゴオオ！！

さて……

現実逃避は止めましょうか。

はい、ただいま絶賛落下中です。大気圏に入る直前ぐらいの高度から落下してます……

え？なんでわかるかって？

スキマが開いていて、そこからホワイトボードがニユキって出てきて、『大気圏突入直前！！まあ上には行かないけど（笑）by神様』って書いてあったからです。

いや、神様？なぜ地上にスキマを開いてくれないのですか？死んじやえばいいのに……

そう思い視線を下に向けた。

ゴォォ！！

早くも、地上が目の前ですね、では死なない事を願って。

逝って来ます！！

両手を胸の前で重ね、祈るような体勢になる。

地面と接触する瞬間に何か体が隙間なく優しく包み込んだ。

チュドーン！！！！

轟音が響き渡り、落ちたところを中心にクレーターができ、砂ばかりが舞う。

モフ……

ファサァー

落ちた、ということには意識がいかにその感触に意識が飛んだ。上のは感触。

下のは、視界が開けた時になにか柔らかかそうなものが地面に落ちた時にしたようなかんじの音。

落ちた時に備えていたような衝撃はなく、モフモフとした優しい感触だった。

さて、今俺の体？に不思議な事が起こっています。

それは何かと言うと……

白銀色の狐の尾が九本生えているのだ！！

えっと……なぜ！？

確か、スキマに入っている程度したらいきなり自分の名前が思い出せなくなって、口調が敬語？と言うかとても丁寧になったのに驚き……ああ、脳内での言葉までこんなものになったのに驚き10分位発狂して落ち着いたっけな。

10分で落ち着いたのはあまりに俺が楽家すぎるからですね。
まあ、ともかく。

地面に落ちても傷一つもなく、生きているのだからいいですよね？その変わりに、まわりの地面が数十メートルもの巨大なクレーターができてしまいました。

そう、俺を中心に深さ数メートルもの深い穴ができた。

さて、混乱はよして自己の現状確認をしましょうか。
まず、

服装ー浴衣、藍色の。

髪ー目でみるかぎり、プラチナ

色のセミロング。

尻尾ー髪と同じような色で九本

ある。

追記ーあれー九尾ですか？

終了。

うん、スキマ入る前の俺ではないですね。

空中にいたときは取り乱して、なにも確認が出来ませんでした。
ここで確かめるとなんか恐ろしい。

やっぱり、神様のせいでしょうね。上空の件もありますし。

はあ……もう。

確かに、二次創作などを見ていると楽しそうですが実際になって

みると凄く混乱しますね。

最後の確認にあるところに手を入れてみる。

裾―折り畳まれた、メモ用紙が

入っていた。

お決まりで、メモがありました。

なにになに……

『異世界に行きたそうだったので送りました！凄いでしょ！えつと、怒らないでね最終的に自分の判断でスキマに飛び込んだんだから。後、君は行く前から自分で能力（こんな能力がいいな―）って決めてたでしょ？その数は神様特権で与えられる限界の数と同じだったから全部与えたから！そこはネギま！の世界みたいなものだよ、原作開始まで1000年くらいあるから好きに生きてくださいね♪by創造神あ……おまけに妖力を膨大に、武術の心得を付けといたから！！神様クオリティー♪口調は趣味だから、てへ！』

突っ込んでいいのかわからない文章ですね。てへ！はないな！！
ただいまのテンションはすごいハイです！理由としては、

・ネギま！の世界であること。

・ずっと思っていた願いが叶った　こと。

の二つが挙げられる。

なにせ、魔法と剣のファンタジー溢れる世界ですから！男なら一度は行ってみたいなとおもうはずです！

そして、チートが叶った！！

そう、チートが叶った！！　はい、大事な事なんで二回言いました。これあれば、俺は大満足です！

落とされた時はなんだ、と思いましたたがもう、神様様々ですね！

はっ……

落ち着け、ピークールにだ。

さて、またもや確認しよう。貰った能力の確認だ。

- ・白面白毛九尾になること。
 - ・魔法は使えなくていいから妖術　を特化して。
 - ・不老。
 - ・妖力の物質化。
 - ・ありとあらゆるものを逆にする　程度の能力。
- おまけ
- ・妖力の膨大な保持。
 - ・武術の心得。

これがなっていることは自分の腰の辺りに生えている九本の尾をみれば信じていいでしょう。

まあ、幸いにも原作開始までに時間はあるから修行に明け暮れましょう。

と、思考を中断させ周りを見渡す。

ここに落ちた時には、日の光で明るかった森の中も、日が沈むとともに茜色に色を染めていた。

そんなに時間たったんだ……

と今更ながらに、自分がどれだけの時間思考の渦に捕らわれていたかを知った。

ふあゝあゝあ……

んー眠くなつて来たな。

よし寝るか！

周りの事など気にせず、眠りに就いたのであった。

？第三時限目（前書き）

あれ？1週間過ぎてる！？

はい、ミスりました！！

すいません？？？

こんな作者ですが感想など待っております♪

作者都合により編集5月8日

？第三時限目

チュンチュン。

太陽が昇ると同時に森の中では、小鳥達のさえずりが響き渡る。

「ふぁーまた朝ですか」

あ、おはようございます。この世界に来て950年も過ごした白^{はく}燈^{とう}銀^{ぎん}です。

いや、時間がたつのは早いもので前の歳と合わせると967才です。

不老というのはわかっていましたが、体験してみるとなんだか不思議なものですね。

さて、この950年間なにをしていたかという主に分の能力の把握と効率化、まあ修行ですね。

修行で出来るようになった事は、

・体を九尾に変化出来るようになった。

・尾を隠せるようになった。

よ うになった。

・すべての能力を使いこなせる

った。

ですね。

では、2日目からの回想入ります。

―回想―

2日目。

さて、この世界に来て初めての朝ですね。
すーはー、すーはー。

胸一杯に空気を吸い込み、思い切り深呼吸を試みる。

うん、空気が実に澄んでいますね。樹の上では小鳥が鳴いていますし気持ちのいい朝ですね。

まあ、やっぱり夢ではなかったというのが驚きですが……

実のところ、朝起きたら自室のベッドの上という夢オチをきいてしまいましたがあっさりと裏切られましたね。

深くはもう考えませんが。

ふあゝ。

眠いですね。

大きく口を開けてあくびを欠いた。

今日は、能力の実践でもしましょうか。

といきなり決めたのであった。

「では、最初にありとあらゆるものを逆にする程度の能力からいきますー!!」

なぜか声に出してしまった。

先ずは、あの樹とあの大岩の位置を逆に。

能力使用!!

……………。

なにも起きませんね……

次は小石とあの雑草を！！

能力使用！！

一瞬にして位置が逆になった。

「おお！！出来ました！！」

はい、要するにまだあんなに大きいものはやれないから修行しろ
と言うことですね。次に行きましょう。

妖力の物質化。

体の中にいままでと違うような感じがあるのはわかりましたが、
それから進展しないので要修行ですね。

尾を動かす。

つりました！！

「ぬぁーなんで九本も同時につるの！？いったぁー！！」
修行で。

1日中、思い付く限りやりましたが結果としてすべて要修行とい
うことがわかりました。

明日から本気出します！！

100年目。

時間飛びすぎですって？気にしないで。

あれから、拠点の洞窟を確保し、毎日修行を繰り返した結果……

九本の尾と妖力がかなり使いこなせるようになりましたね！！
尾は自由自在に動かせるようになり、妖力は炎を出したり結界張
ったりとすべて自己流でやりました！！

妖力の物質化は尾に3本纏わせる位に。

ちなみに、纏った見た目は白銀色の尾に薄青い膜が包むような感
じて、切れ味は大岩をスパツと一刀両断しました。

したときは冷や汗が止まらなかったですね！

妖力が使えるようになって九尾の狐に変化できるようになりました。
後はお腹が減らない、成長しないからだろうか？怖い怖い！！

500年目。

すごい時間が飛んだ？気にしたら負けですよ！

初めての名前が無いのに気づきました。

決めて有りましたからいいですが。白燈銀にしようと前の世界で
決めていたのでそのまま採用に。 程度の能力以外ある程度完成し
ました。

妖力の物質化で刀を作れるようになりました、名前を『へきしんてつ碧神鉄』
見た目のまんまつけました。

反省はしてますが、後悔はしてません。

武術は毎日欠かさずに鍛練してますので拳が音速超えました。

衝撃波の発生で大変なことに！！ あ、人と話してないな……

そして、現在。

時間は気にしないで。

すべての能力を使いこなせるようになりました。

ありとあらゆるものを逆にする程度の能力も完璧に仕上げました。
なんだって逆にできます！

では、自分とあの100メートルさきにある樹の場所を……

変えます。

そう思った瞬間に、銀の視界は目まぐるしく変わりさつきまで銀のいた場所には指定をした樹が立っていた。

いや、達成感がありますね。この前までは、ちっさな小石しか逆に出来なかったのですが練習と時を重ねる内にだんだんと色々なものから、大きなものまで逆にできるようになりました。ほんとに練習は大事ですね！

あ、そういえばこの約900年も長居しているこの森に二つ名がつかしました。元々の名前もありましたが、こちらの二つ名の方が有名です所以说っておきますね。

『惑いの森』

なんか森に迷った人達を得意の幻術などを使って帰していました。らいつの間にかついていました。

そして何時しか俺にも付いてました。

『白狐』

いや、虎ではないです。

『惑いの天狐』

多分、霊格の高い人が迷った人達を帰しているときに俺をみたんでしょね。帰しているときは狐の姿ですから。

『白天狐』

分かりやすくいいと！

ずっと話していましたが、話しているときも歩いていたんです。やっと目的の場所に着きました。

と、歩みを止め顔を上げる。

そこには、大きなそれはとても大きな和風の屋敷が建っていた。
「何時見ても立派ですねー」

一言呟き、巨大な門に歩み寄り叩く。
ドンドン！

「俺です、久し振りに下りたので長殿にお話をー」

少し大きめの声を出す。

ギイー

すると木と木がこすれあう独自の音がして、すこしづつ開門して
いく。

「やはりあなた様でしたか！ー」

「久しぶりですね」

門が開くと赤白の袴を来た女性が迎えてくれた。

しかし、ここに来るのは10年振りぐらいになるのによく覚えて
くれたな！

などと思い、1人自然と顔が綻んでいた。

「よく、俺のこと覚えていましたね？」

「10年くらい前でしょうか？私その口調なのに俺などと名乗った
り、その容姿は特に珍しいので忘れもしませんよー！」

そんなに珍しいかなー。

と呟きながら白髪 of 髪の毛を人差し指でクルクル。

「その癖も変わってないですね」

そう、なんかあった時にクルクルしてしまうのだ。

「これは直りませんよ」

正直、本当に治らないですよ。

「まだ挨拶を言ってますでしたね、私しか居ませんが…」

挨拶なんてあったかな？

「関西呪術協会へお帰りなさいませ、白燈銀様！！」

ああ、これが！

などと今思い出したのであった。

？第四時限目（前書き）

オリキャラ登場！

詠春のじいちゃんです♪

なんで時間枠ミスったんだろう…この話で詠春少年期だすつもりだったのに…

こんな作者ですが感想など待ってます♪

？第四時限目

門を潜ると、視界一杯に桜の花が見えた。

「おお……」

つつい感嘆の声をもらしてしまふ。

「銀様が観られるのは、10年振りですよね？」

「ああ、10年だな」

「この10年色々な事がありました……」

巫女服を着た女性は一息入れて話始めた。

「この桜の事もありますが、5年前に青山厳寒様がお亡くなりになりました……」

「……!?!」

青山厳寒。

俺がこの関西呪術協会の本山に出入りできるきっかけをくれた人だ。俺にとって、親友みたいな奴でした。彼奴が逝くとは……
ちよつと回想入ります。

60年くらい前。

俺は森のなかを歩いていました、まあ日課的な物ですから。

誰だ、爺い臭いと言った奴は出てこい！お前の家の味噌汁の味噌を全部毎日取り除いてやる！！

ともあれ……

今日は日課と言うこともありますが、本題、本命は違うのだ。

今日、朝目が覚めると森がやけに騒がしかった。

なにかと思い、妖力を森中に巡らせてみたら……

1000年くらい前に封印されていた、『リヨウメンスクナノカミ』の封印が解けようとしていたのです！

ちなみに、『リヨウメンスクナノカミ』とは、二面四手の大きな鬼の事で今は近くの湖一面に封印を施して、その湖の中に封印してあります。

まあ、とても大変な事です、なかなか上位の存在ですしあんな巨体を封印するとなると、面倒なぐらいの札とかが要りますしね。

様子見たところでは封印は持つてあと数時間ですね。

心配はしませんよ、この近くに京都神鳴流の本山がありますから。

妖力巡らせた時に、神鳴流の剣士らしき団体も引つ掛かったので状況からみて封印が解けそうなのがわかって再封印しに行っているんでしょね。

しかし……

「暇潰しに、見に行きますか」

パアッ……

と銀の身体が淡い光に包まれたかと思うと次の瞬間には人間の形をした銀ではなく、白銀の毛に覆われた全長3メートルぐらいの九尾がいた。

その九尾は、自分の軀以上の長く綺麗な尾を感覚でも確かめるように上下左右に動かしていった。

（やっぱりなんか違和感があるな……）

話せないで心の中でそう呟く。

ケーン！！

高く、どこまでも響くような声で鳴いてその場から銀の姿は消えた。

——その頃——

ケーン！！

「長！あの天孤が鳴きました今日は良いことがあるかもしれませんね」

「アッハッハ！確かにな。彼奴が鳴くのは珍しい、大方今回の『リヨウメンスクナノカミ』に勘ずいて鳴いたんだろうな！」

京都神鳴流の本山から離れた森のなか、神鳴流の長あおやまげんかん青山厳寒は神鳴流の中でも腕に覚えのある10名の剣士を連れ『リヨウメンスクナノカミ』を再封印するために湖に向かっていた。

青山厳寒とは、京都神鳴流の宗家に生まれ厳寒の父が亡くなり今現在神鳴流の長を努めている男だ。

厳寒を部下、門下達から言わせると、

「面白い人だ！」

「義理や人情に厚い」

「とても信頼できる人です」

などと、まだ歳も若いが下からの信頼がとても厚い良い長だ。実力もあるのですなおさら、信頼が置ける。

武勇伝としては10才の時には『弐の太刀』を使いこなせるようになったとか……

兎に角、凄い人だ。

「長、なんで封印が今になって緩んでいるのでしょうか？」

話しかけてきたのは神鳴流の女の剣士。

「知らん、どうせ先代のまた先代の先代の先々先々先代ぐらいが封印に札けちったからだろう！」

「あははは……そうですね」

「しかし、『リヨウメンスクナノカミ』か……」

「どうかしたんですか？」

「いや、なんでもない」

「長がそういうんならそうですね！」

ニコッ！

と笑顔を見せて進んでいった。

「おやー長？婚約者がいるのにあいつとまさか！？」

さっきの女剣士の笑顔をみて勘違いというか、からかってくる馬鹿が一名。

こいつは、こんな事がなければいいのだから――

ゴンッ！！

腰に差していた愛刀を瞬時に抜き、鞘ごと頭を叩いた。

「っ！？逝ったー！頭から出てはいけないような音がした！」

からかった男剣士は叩かれた頭を必死に抑えながら地面をゴロゴロとこるがりながら奇声を発していた。

パライイーン！！

不意にガラスの割れるような音が響き渡った。直後に空気を伝って凄い量の妖力が伝わってきた。

「なっ！？封印が解けただと！？」

急がないと危ないな！！

「全員、今から急いで『リヨウメンスクナノカミ』が封印されていた湖まで行く！！出来るだけ早くだ！」

さっきまで地面を這いずりまわっていた男も瞬時に立ち上がり顔を変えた。

厳寒は全員が行けることを確認して、

「俺に続け！！」

「『はっ！！』」

掛け声と共に瞬動を行った。

「…………え!？」

湖に着くとありえない光景が待っていた。

「全員打ち合わせどりの位置につけ！」

体長3メートル、尾を合わせると8メートル位はあるであろう白銀の九尾と二つの顔と四つの腕をもつ『リヨウメンスクナノカミ』が戦っているのだ。

戦っているといっても、圧倒的に白銀の九尾が勝っている。

『リヨウメンスクナノカミ』の腕の数を九尾の尾の数で押し、吐き出す妖気の塊さえも九尾自身から発する妖気で相殺していったからだ。

圧倒的というより……虐殺だな……。

心の中でそんな事を思いながらもその戦闘（虐殺？）をみて、いつ剣士達に封印の術式を展開させるか機会を見逃さないためには真剣にみいるのであった。

俺は今、神鳴流の剣士達を先回りして湖に来てしまいました。

主に戦い、神鳴流がどのようにして戦うかを見たいからです。

ポフッ…

いつのまに人間の形に戻っていたのか、そんな音をたてて湖が一通り見渡せる高い樹の枝に腰かけた。

ふう、と一息つき右手を肩の高さまで挙げ横に一線を引く。

はい、認識阻害の結界の完成です！これで、『リヨウメンスクナノカミ』略してスクナにもバレませんし、神鳴流にもバレませんか
ら安心ですね。

「高みの見物とで……」

パライイインー！！

「お目覚めですか……」

ガラスが砕けるような音と共に、湖が発光し密度のこゆい妖気が漏れだした。

湖の中心部ではスクナが上半身だけを出してこつちを見ていた。

「ん？こつちを見ている？」

あ、目が合いましたね。

「視えているのですか！？」

いやいや、この認識阻害の結界は上位級の悪魔をも騙せるのですよ！？それを一瞬だなんて！！自信なくしますね……

なんて落ち込んでいるのも束の間、スクナが口を開いたと思ったらビーム（妖力砲）を打ってきたのだ！

「おおぅ！？」

とつさに九本の白銀の尾を出し、妖力を纏わせビームに向かって飛ばす。

僅かこんま1秒の早業！！

飛ばした妖力は、三日月のような形の斬撃となりすべてが目標にあたり相殺した。

「その喧嘩買いましたよ！！やられたからには、殺り返します！！」

封印は神鳴流に任せればいいですよ？もう近くにいますし。変化して行きますか。

光が身を包む、すると白銀の九尾が現れた。

（さて行きますか！）

全身に身体強化するために妖力を張り巡らせ、後ろ足で枝をけり空中に舞い上がりタンツ！という切れのよい音をだし虚空瞬動で瞬間にスクナの眼前に飛び込んだ。

しかし、飛び込み空中に停止した時を狙ってスクナは口から特大ビームを放ってきた。

（試しますか！）

銀に焦った表情はなく、とても落ち着いている。

（結界を展開します。）

結界を張るのを意識する。

すると銀の眼前を頂点にした円柱方の異形の結界が展開された。
ゴオオオ！！

もの凄い轟音が轟くが、異形の結界にはキズ一つなく特大のビームだけが霧散して消えていった。

（案外よわいです…ねッ！？）

受けきったと思った後には、四つの巨大な拳が四方八方から攻めてきていた。

一つ一つがとてつもない攻撃力を持っているそれは、今にも銀を殺そうと迫ってきている。

ガキイイーン！！

スクナの拳と銀の尾がぶつかり合う、均衡しているように見えたのは最初だけであつた。

スクナの打撃の速さに銀が慣れてしまったからだ。

（攻撃力がありますが速さがなから当たりませんねー）

事実、銀は空中で攻撃をヒラリヒラリとかわしている。

避けきれないものは、尾で受け流していった。

スクナの攻撃は最初に比べると大振りになっていた。

自分の攻撃が当たらずに小さな銀の攻撃が当たっているからだろ
う。

（もう少しですかね……）

すると、スクナは四つ全ての拳を大振りに力一杯に降り下ろしてきた。

（狙い道理！！）

当たったら完全に致命傷は免れないのにわざとその場所から動かずに拳を待つ。

ザシュ！！ザシュザシュザシュ！！

スクナが吼える、大気が震える。

スクナが降り下ろした全ての拳に銀の青白く光る尾が貫通していたからだ。

尾は真っ直ぐに伸びて、拳が当たる瞬間に青白く光り貫いた。
斬！！

貫通していた尾を右に振り、スクナの巨大な拳をあつさりと切り落とした。

湖に大きな水柱を立てて落ちた。

（期待してましたが、期待ハズレでしたね……ガツカリです）

尾についた血を払い、スクナを見る。

痛みにもがいて混乱している。

（えっとーああいたいた！）

周りを見渡すと神鳴流の剣士達が湖を囲んでいた。

その中でも腕のたちそうなというか頭らしき人を見つける。

（あなたが神鳴流の頭ですか？）

念話をおくる。

（！！？？はい私が神鳴流の長青山厳寒ですが、この念話は天弧様で！？）

（いや、天弧ではありませんが目の前にいる九尾です）

（その九尾様がなにを？）

（今から『リョウメンスクナノカミ』の頭を落とします、そうしたら封印お願いできますか？）

（先の戦闘見させていただきました、九尾様の言う通りにしましょう！）

話分かる人でしたね。

（厳寒さん、用意はいいですか？）

（いつでも可能です）

では行きましょう！

目線をスクナに戻し、尾に妖力を張り巡らせ青白く発光させ物質化を確認する。

空中を蹴り、またスクナの眼前にでる。

（眠って下さい！）

体ごと回転させて尾を一薙ぎ。

「封印始めー！！！」

下では厳寒さん達が儀式を開始して湖が光っていた。

？第五時限目（前書き）

作者、体育祭と喘息が重なり遅れました！！
喘息継続中…

お気に入り件数100件突破！！　ありがたばかりです♪

まだきついですがこれを支えに頑張って行きたいと思います！

グフッグフッ！？

？ 第五時限目

「アハハハハ！！」

狭い和室の部屋の中に男二人の笑い声が木霊する。

その部屋の所々には、一升瓶などが散乱し酒の匂いが充満していた。

「おい、ぎんーなんで九尾なのに金色ではないんだよ！」

厳寒の声は酒の影響で、語気が強く独特の発音をしていた。

「俺は白銀色が好きだからです」

それに対して、銀は顔色一つ変えずにいつもの調子で冷静に返していく。

「九尾というものは、金色がふつうだろうー」

「俺は好んでこの色になったのでいいんですよ」

「なにー！！俺の好きなやつはお前の婚約者だとう！？」

「どこをどう聞き間違えたらそうなりますか！？」

「表へでろうー！！」

「バツ！！！！」

と立ち上がり、バン！！と襖をあけ、ドタドタと厳寒は姿を消した。

ああ、厳寒はそうとう出来上がっていますね。

『リヨウメンスクナノカミ』封印事件が解決したあと、俺は京都神鳴流の長青山厳寒に

「本山で今回の宴を行うので来てください」

とお呼びをうけ、人間の姿で本山に来た。
すると

「お前は何者だ！？何故人の形をしているのに妖力を持っている！？」

隠しているのに気づけるんですね…。将来有望ですね。

「青山厳寒に呼ばれてきたのですが…」
と言ったら

「……まさか天孤様で！？」

「ああ……そう言えば九尾の姿しか見ていませんでしたね？」

ドロン！？

と姿を九尾にすると、門番は顔が真っ青になり、

「たたた大変失礼をはは働きました！！すいません！」

と超音速低頭。

「いいですよ、もとはと言えば俺がこの姿で来たのが原因ですから。
顔を上げてください」

「は、はあ……」

困りながらも顔をあげる。

「厳寒様から天孤様が参られたら座敷に通せ、と受けておりますので来ていただけますか？」

「ああ行きましょう」

門が開き、目の前の剣士が門をくぐっていくそのあとを銀は周りを見渡しながらついていった。

門をくぐり、靴を脱ぎ本殿にあがり、幾人かの巫女とすれ違い奇怪な視線を向けられてあつという間に宴会の開かれるであろう座敷についた。

そこからは、魚や肉などの食欲を誘う匂いとともにアルコール、酒の匂いも混ざっていた。

（ちゃんとした料理たべるのいづぶりだろうか？美味しそうですね…）

ジュリリ…

思わず舌なめずりをしてしまう。

それも当たり前だった。

この世界に来てからこれまであの森の中でサバイバルな生活しかおくって来なかったからだ。

「銀様ここでお待ちください…」

と案内係の剣士は襖を開け部屋の中へ。

いつまでも天孤と呼ばれるのはあれなので、ここまでの道中に名前前で呼ぶようにさせました。

「銀様中へおはいりください」

襖をあける。

「おお…！」

視界一杯に広がるのは前世でも見たことのない高級食材を使った料理の数々。
すごいですね…。

「銀様こちらへ」

神鳴流の長青山厳寒が自分と対の場所を進めてきたので素直に従い座る。

「さて、本日の主役も揃ったところで『リョウメンスクナノカミ』をだれひとり負傷者を出さず封印出来た事に感謝し祝いの宴を始めましょう！」

オォー！

「では乾杯の音頭は今回の宴の主役の銀様にとってもらいましょう」

「え！？」

一つ疑問が浮かぶ。

「俺は妖怪ですよ？神鳴流とは本来殺るか殺られるかの位置にいるものです。今日ここに居る事も特例だと思うのですが？」

疑問をぶつけてみる。

「いやいや、銀様。『リヨウメンスクナノカミ』の封印が解かれて元来は我々神鳴流の剣士だけで再封印するつもりでした…『リヨウメンスクナノカミ』を再封印するに当たって大勢の死者などが出ることを予想していましたが、銀様のおかげで死者を出さずにすんだのです」

厳寒は間をあげ、銀の目を見ていった。

「つまり我々は銀様に命を救ってもらったのです。我々全員、命の恩人に感謝しない輩はいません」
「と云うことで銀様、音頭のほうを。というか、これは銀様に感謝の宴ですし」

すこし照れながらにやけ笑いでほうを掻いている。

「では…」

とくとくと、酒を汲み立ち上がる。

「皆さま、今日は俺のためにこんな宴を開いていただき感謝します。厳寒にかわり俺白燈銀が乾杯の音頭をとらせていただきます！」

いい人ばかりですね。

厳寒をみる。

頷いてにやけている。

「では乾杯！！」

「『かんぱーい！！』」

全員の声が重なり狭い部屋にこだまして宴が始まった。

そして、腹一杯に御膳を食べ終わった時には目の前の厳寒は出来上がっていた。

「さて、ここは開けた外です…」

「ああ、なんで銀は空気にはなしかけているんだあ？」

「さあなんででしょう？」

今俺は多数の神鳴流の剣士達が見ているなか神鳴流の長青山厳寒と一騎打ちをしています。

なんで多数の剣士達がいるかというと、俺と厳寒の話聞き付けた一人の剣士から話が広がり「銀様と厳寒様が戦うのは面白そうだから！」という理由で集まってきた。

「余所見とは余裕だな銀!!」

「おっと!？」

ガギイイイン!!

厳寒の長い野太刀と銀がとっさに腕から出した青白く発光する剣がぶつかり合う。

その次には厳寒はもう片方の手に持っている少し短い野太刀を降り下ろしていた、しかしその野太刀が当たるまえに銀は厳寒を力任せに押し返し間をとっていた。

厳寒はよたよたと体勢を建て直していた。

さっさと気絶させますか。

ズン！！

銀が妖気をだし、空気が圧迫される。

妖気の放出が一定量に達すると、銀の腰の辺りから九本の尾が現れた。

「銀ー、本気だなあ、ヒックー！」

「次で決めますよ、厳寒！！」

九本全ての尾に妖気を纏わせ、尾が青白く発光し妖気の物質化が完了する。

静寂が場を支配する。

タンッ！！

互い同時に瞬動で接近。

「二刀連撃斬鉄閃！！」

「びげんきゆうれん尾剣九連！！」

ガアアアアン！！！！！！

厳寒と銀の体が交差し尾と太刀が交わり地に足がつく。

パタン…

先に倒れたのは厳寒。

「安心を峰打ちです」

尾に峰があるかはわからないが……。

グガアアア。

盛大に厳寒のいびきが響き渡り、試合？が終了した。

そんなこんなで次の朝。

銀は厳寒に呼ばれ部屋に呼ばれていた。

「ああ、頭がいたい……」

「昨日あんなに飲むからですよ」

布団に入り上半身だけをお越し、二日酔いに効くであろう薬を飲んでいた。

「苦い……」

顔をしかめていた。

「厳寒、話があるということでしたんですが？」

「そうだったな……」

頭に置いていた手を戻し真剣な顔になる。
空気も引き締まる。

「まず一つ、昨日の試合私は銀に負けた」

「そうですね……」

「銀がくるまえに全員で決めていたのだが、試合で私が負けたら銀は本山、つまりここに自由に出入りしていいというものだ！」

「いいんですか？」

「全員で決めたものだからな！しかし裏には敵にまわられたらどうしようもないというのが建前だがな……」

「いいですよ、旨い飯が食べられるならですね」

そんな建前なんて俺にとってはほとんどの意味のないものですし。

「二つ目は、あれなんだが個人的な頼みだな」

「聞きましょう」

「銀は私たちよりの寿命よりもはるかに長くいきているよな？」

「そうですが」

「この京都神鳴流を見守っていてくれないか？」

やっぱりそう来ましたか。

「……」

沈黙。

「やっぱり図々しいよな」

「此方も一つ条件があります。これを飲んでくれればその話のりましよう！」

「できることなら！」

「それは……」

「それは？」

厳寒のおうむ返し。

一拍おいて言葉をかえす。

「時々ここに帰って来ますから、その時旨い飯を用意してください
！」

「あ……」

そんな事かよ！と茫然としている厳寒。
面白い顔してますね。

「そんなことでいいのか？」

あ、戻りました。

「飯さえあればいいですよ」

サバイバル歴900年やっていますが、さすがに森の食材だけではあんな立派な御膳作れませんし。

「変わった人だな」

「いやいや、変わった九尾の妖怪ですよ」

これが、俺はここに自由に出入りできるようになったいきさつだ。

・第六時限目（前書き）

テストなどがひと区切りついたので投稿を！！
ふう

・第六時限目

「銀様？銀様？」

声がやけに近く感じる。

「銀様！？」

「おおっ！！」

巫女さんの顔がすぐ近くにあつたのでおどろいた。
どうやら俺は深く考えすぎると周りが見えてないらしい。

「んんっ？？どうされましたか？」

「考え事をしていて、気づいたら貴女の顔が近かつたので驚きました」

「あや！？申し訳ございません！」

深々と頭を下げてきた。

「頭を上げてください。貴女は、別に悪いことは何一つしていないのですから」

「わかりました」

頭を上げ深呼吸。

「銀様は何を考えていたのですか??」

前で案内をしていた巫女さんが唐突に聞いてきた。

「ああ、千代長の厳寒の事についてですよ」

「やっぱりですか　良く遊んで居られましたよね厳寒様と」

「まあ、一緒に酒飲んだり。鬭ったり。酒飲んだり　」

あれ、酒しかのんでないような

「銀様たちが酔われた後は大変でしたよ!」

「いやーすまん!」

確かに。

最初に酒を飲んだときは、あまり酒に対する抵抗力が無くて頭痛が痛いときたら俺の周りの家屋が半壊していたりしていましたからね。

「その点では深くお詫びを!」

腰から斜め四十五度に折り曲げきれいに頭を下げる。

「私が母さんから聞いた話ですから私に誤れてもあんまり意味はないのですが、ここは許してしんぜよう!」

「ははあー有り難き幸せ!」

はたして、これが幸せかどうかは分かりませんがノリに乗ってみました。

「プツハハハハ！ー！やっぱり銀様は変わっておられませんね」

「俺はいつまでたつても変わりませんよ」

今の所変わる気はゼロなのでそう答えておく。
不意に巫女さんが立ち止まった。

「銀様、着きました」

もう着いたのですか。早いですねー。

やはり楽しい時間は速く過ぎていきますね。

巫女さんが立ち止まったところには襖があり、その横の下駄箱にすでに何足かの靴が並べられていた。
その襖からさらに奥を見ると、二、三個とさらに襖がありその部屋の広さが伺える。

「ここで今日宴会がひらかれます」

右手を肩の高さまであげ手の平で襖をさす。

「ここであるんですね」

「はい、ここにあります。銀様、私はこれからの用意などがありますので案内はここで終らせていただきますね」

「了解しました。では」

巫女は俺の顔を見て自然にニコツと微笑んで早足に去っていった。
巫女の後姿を見送った後に襖に向き直り手をかける。

良いにおいもするからおいしそうですね　楽しみです。

顔をわずかににやけさせて襖を開けた。

「銀様――！！覚悟おおお！！」

「又アツ！！」

尾に妖気を纏わせ瞬時に物質化。

ガギイイイン！！

鉄と鉄、刀と銀の尾が交差し鈍い音を奏でる。

「ッ！？不意打ちもダメか、ならば！！」

「って、コラ！人の話を聞き　」

人かどうかは置いて。

いきなり切りかかってきたその人物は、銀の話を聞かずに再度切りかかってくる。

「神鳴流奥義雷m」

ゴウン！！

「いったーーーー！！！！！！！！」

「はあ
」

とてつも無く硬いものが何かにぶつかる音がした。

その音源は今悲鳴を上げた人物の頭から発せられていた。

みるまでも無く銀の物質化した妖気を纏った尾が頭の上にふり下ろされていた。

「次期長、いや。今の長であるお前がそんな幼稚なことをしていてもいいんですか？」

そう、今突然切りかかってきた人物は現神鳴流の長である青山迎春あおやまげいしゅんである。

前長の厳寒の不詳の息子である。

強さは厳寒よりも強く歴代の長の中でもトップクラスであろう実力の持ち主だ。

「いやー、親父が死ぬ前に「銀様をお前が倒してみろ！！まあ無理だな！」って言ったからなんかムカーって来たからつつい」

「つついではない」

ゴウン！

そんなダメな子には尾剣制裁、もう一発頭にお見舞いしておく。
というか厳寒のやつめ恨みますよ。

「痛い！！許して！！」

「まあ許しますが次からはしないように」

「うーい」

迎春はだらしの無い返事を返して納刀した。

それをみて此方も物質化を解き、妖気を霧散させる。

「では銀様、今から宴会を始めますので前に」

先ほどの態度とは打って変わって長態度をとり始めた。

ふうん、こんな顔もできるのですね。

十年という長い期間きていませんでしたから驚きますね。
ひょんなところで時間のたつ早さを実感する銀であった。

そんなことを考えているうちに迎春は宴会の音頭をとり始めていた。

「今回、この宴会を開く理由は皆も知ってる通りに十年ぶりに銀様がこられたからだ。それでは銀様に話をしてもらいたいと思う、銀様前へ」

「聞いていない」

不幸だ。

迎春に呼ばれ仕方なく迎春の隣に立つ。

ダンッ！！

「ッ！？」

そして迎春の足を思いつきり踏む。

迎春が潤んだ目で目配せしてくるが知らぬ振り。

「迎春から挨拶を承りました白燈銀です。今回は

」

つらつらつら。

と挨拶を済ませ宴会は始まった。

――――。。

宴会もだいぶ建ち、うち解けてきたころ迎春が不意に話しかけてきた。

「銀、話があります」

「なんですか??」

「ここでは話辛いので外に出ませんか?」

迎春の顔はいつにもなく真剣だった。

「了解した」

二人で周りに気づかれること無く部屋を変えたのであった。

とある部屋の一室。

お互いに向かい会い腰を下ろした。

「話とはナンですか迎春？」

「父、厳寒の遺言というか銀様あての遺書を預かっていますのでそれをお渡ししようかと」

「とういか迎春」

「なんですか？」

「話し方似合わないよ」

普段というか、昔や今さっきまでの口調と比べると異常にきれいな敬語をつかっているので本当に似合わなかった。

「やっぱりー」

とたんに戻る。

「まあこれも遺言のひとつなので我慢してください」

なら、仕方の無い。

すると、後ろの小棚から手紙らしきものを取り出した。

「銀様これを」

迎春から受け取り、まず目についたのがでかかと（青山厳寒の遺書）白燈銀様あて（と書いてあることだった。
ふむ、何か疑問に思ったがするーしておきましょう。

裏には何も書いては無い。
早速開けて読んでみる。

『銀様、この別れに言葉はいらないでしょう。これまで有り難うございました、そしてさようなら。』
青山厳寒

簡潔。

息をふうとはき「此方こそ」小さくつぶやきその一言で踏ん切りをつける。

そして再度文面をみて見ると見落としがあるのに気づいた。

『追記 銀様が帰る前にした（迎春は斬岩剣と斬鉄剣どちらを覚えるのが早いか）という賭けは私が勝ちましたので約束は守ってもらいますよ!』

え？

すっかり忘れてましたね

「迎春!」

「ナンですか銀様？声がうるさいですよ」

「厳寒は約束がなんたら言っではいませんでしたか？」

忘れたならば聞けばよし。

「ああ遺書の中に『多分、銀様は忘れておられるから約束の内容をここに示す』って書いてありました。というか本当に忘れていたんですね」

少し笑いながら此方をみってくる。

「年寄りには記憶力がのー」

とぼけてみる。

「何千年生きた妖怪のくせに、年なんて関係ない！」

ズバツと一刀両断。

「迎春よ、教えてください」

本当に思い出せませんね。

「えーと、確か『孫の修業期間の付き添い』ですね」

「あ！？思い出しました！」

確か、月見酒を楽しんでいてそこに迎春が来て厳寒が、

「銀、賭けをしないか？」

「乗った！で、その内容はなんですか？」

「迎春が何の技を速く覚えるかだ」

「では斬鉄剣で」

「私は斬岩剣で」

と賭けをして忘れて帰りましたっけね。

ちなみに俺は『蟹一年分』だったような。

「なんて書いてあった？」

「迎春の息子の修業の手伝い」

え？とポカンと口をあけ数秒間フリーズする迎春。
ハッ！！とこっちに戻り俺の目を見て

「え？父はそんなこと頼んでたんですか？貸して！」

俺の手元の遺書を引つたくり読む。

その驚愕の文を何回も読み返し、本当にそう書いてあることを確認した迎春。

「本当に書いてありましたね　父が分かりません」

「ちなみに最後の言葉には同感しておきます」

ハハハ

お互いの乾いた笑いが響きあった。

「でも　」

迎春がぼそつとつぶやいた。

「どうしましたか？」

「いやあ、もうすぐ子供が産まれるので父の遺言というか約束どうり宜しくお願い致しますね」

「え？」

今度あつけにとられたのは自分だった。

いつかはこの迎春にも嫁ができて子供ができるだろう、と予測はしていたがまさかこんなにも早くその日が来るとは思っていなかったからだ。

「銀様？」

「あ、ああ。頼まりましたよ」

「もしかして銀様。宴会で嫁の紹介していなかったから、結婚していないものと思ってたでしょ！」

少し自慢げに話してくる。

確かにそうなんだが。

「だって、お前みたいな男をもらってくれるいい人がいたんだなあ
と、思ってたでしょ」

「ガーン!!」

言葉をいい終わった直後に迎春は口にも出してすごい勢いで落ち込んだ。

その落ち込みようは、見えるはずの無いものつまり負のオーラが見えるほどで黒い膜状の何かが覆いかぶさっていた。
ここまでされると罪悪感を覚えますね。

「ごめんなさいね迎春。まあ、たてなおして下さい」

前に行き手をさしのばす。

「はあ、俺だつてきちんとやればなかなかの男なんですよー」

そんなことをいいながら差し伸ばされた手を握り起き上がる。
いやいや迎春、いい男は自分でそういうことは言いません。突っ込み一本。

「そういえば迎春、子供の名前は決めたんですか？」

「もちろんです」

「なんというのですか？」

一息の間をおき。

「詠春です」

と言った。

ここでひとつ確認を。

俺は転生者です。

やっとの原作キャラとの接点に俺は内心狂喜乱舞していた。

・第七時限目（前書き）

やっと投稿、学校忙しい。

・第七時限目

「今日もいい天気ですね」

俺は今外にいる、所要日向ぼっこつてやつです。少し経過を
。 厳寒からの急な遺書を手渡されてから早6年、身ごもられていた迎
秋の子供詠春は元気に産まれてきた。
詠春は5歳である。

まあ、5歳になるまで何があつたといわれても、同じことを繰り返
し書くだけなので簡単に紹介する・

5歳までに舌足らずだが言葉を覚えて簡単な修業ができるようにな
った。

それで十分だろう。

他の幼児に比べるととても早い成長だと思いが神鳴流では普通だっ
た。

「銀様ー！」

屋敷らか普通の木刀よりも幾分か長い木刀を持ち駆けてくる元気な
少年一人。

その少年の名前は青山詠春。

将来、次期京都神鳴流長であり、ナギ・スプリングフィールド引き
入る『紅き翼』の一員。

魔法世界では『サムライマスター』の二つ名で知れ渡る男。

無口でキレルと怖いと書いてあったが、今は5歳の詠春はともか
わいげのある少年だ。

「詠春型の稽古はすみましたか？」

「はい、お父様がもうすんだから銀様のところで稽古して来いって」

「なら始めましょうか」

「はい！」

昼下がり元気の良い声が響いた。

場所をうつし中。

屋敷から出て森を奥に進むと開けた広い場所がある、そこを何時も詠春との修業の場所に行っている。

「銀様今日はなにををするのですか？」

小首を傾げて聞いてくる。

「今日は体力づくりのためにガチンコ鬼ごっこをやりたいと思います」

「ガチンコ鬼ごっこってなんですか？」

「詠春鬼ごっこは知っていますか？」

「はい、二人以上で捕まえる側を鬼としてその鬼から一定時間逃げ切る遊びですよね？」

「正解です、今回の修業は3時間俺が手加減をして鬼をやるので詠春は本気で逃げてください」

「えっ！？」

詠春は素っ頓狂な声をあげて啞然。
良くみるとガクガクしていて顔が青くなっている。

「無理ですよ！いくら銀様が手加減をしたからといっても僕が逃げ切れるわけがありません！」

当然の反発。

確かにこの前に、

「手加減するから模擬戦をしましょう詠春」

「いいんですか？宜しく願います！」

「たあっ！！」↑詠春。

なかなかの太刀筋これぐらいでいいかな？

「ふん！」↑俺。

ガン！！↑木刀同士がぶつかる音。

ズドーン！！↑力加減をみすつて詠春がたたきつけられる音。

ガクッ ↑詠春気絶。詠春手加減トラウマの確定。

ということがありましたが、そこまで反発しなくても。

「では他のにしますか？」

「はい！」

顔に明るさを取り戻し震えがとまった。

「鬼と戦ったことはありますか？」

「1度だけなら」

「ならば」

懷に手をいれガサゴソと何かを取り出す。

「今日はリアル鬼ごっこをします！」

ボロボロボン！！！！！！！！！！

「うわっ！」

銀が手に持っていた何かを宙になげたとたんに煙が当たり一面を覆った。

「銀様！リアル鬼ごっこ　　こ　　って」

やつのことで言葉をつむいだ詠春。若干頬が引きつっているが。まあ、それもそのはず詠春が目を開け、煙が晴れたときには目の前にいたはずの銀は居らず、変わりに所狭しと鬼がいたのだから。

「ぎぎぎ銀様！！！！！！ここここれは！？」

木刀でいつでも対処できるように構えを取りながらおびえながらも疑問を口にする。

「その鬼たちは俺が作った式紙です、本物ではないですから安心してください」

その言葉に安心したかホッと胸をなでおろし、銀がだした鬼を観察する。

そして何かにきずいたか声を上げる。

「あ！角の先に御札があります！」

「それが今回の修業の要ですよ」

「どうしてですか？」

詠春の横に歩み寄る。

「では実例を見せますね」

銀自らいつの間にか取り出していた木刀に妖力を通し、強化させる。タンツ！と地面をけり一番近い鬼の目の前に踊りでて、強化した木刀で鬼の胴体めがけて一振り。

斬！

鬼は上半身と下半身が真つ二つに分かれ崩れ去る。

すると詠春から感嘆の声が上がる。

しかし感嘆の声は驚愕の声に変わった。

普通お別れした上半身は重力に従い地面に落下するのだが、地面に落ちる前に粒子のようなものになり変わり消え消滅したかと思ったら下半身の切れ目から消えたはずの上半身が生えてきていたのだ。

「
」

詠春あんぐり。

「このように何度でも復活します」

「銀様この修業むりでは？」

戻ってきた詠春が質問。

「詠春の言うとおりにこのようにし続けると終わりません。しかしこの鬼を倒す活気的な方法があるのです」

そして瞬動で鬼に近づき狙ったのは胴体ではなく、御札だった。木刀で御札を捉え振りぬく。

ボン！！

御札が鬼から離れると鬼は煙に変わり消えていった。

「つまり、御札以外を狙うとなんども不死鳥のようによみがえってくるが弱点である御札を鬼からはがせば鬼は消え去ります」

「そういう事ですか、安心しました」

「安心する暇はないですよ！今からその鬼たちと多体一で乱闘を行

います」

サアアア　　、急激に詠春の顔が青ざめていく。

「え　　」

「俺はチョッとここを離れますので頑張ってください」

といって背中を向けてどこかに行こうとする。

「ちょ！」

詠春の反抗。手を伸ばす。

「ああ、もし倒れたら襲ってこないようにしていますから安心して
気絶してください。では――！」

シュタツ！

という音とともに消えていき、むなしくも詠春も手は宙を切った
だけだった。

一方そのころ。。。。。

ずいぶん遠くから監視してましたね　　。

銀は詠春の修業場からかなり外れた山中で長めのロープをかぶった

いかにも怪しい奴等を見つけていた。

なにか引つかかるといつか見られてると思い索敵してみたら見事にここに敵が引つかかり潰しに来たのですが、どうでしょうか？

ロープの数は6人。みたところ魔法使いでしょうね、関東魔法協会？大方近衛近右衛門の差し金ですかね？詠春が産まれたときに「わしの所が大きくなったら詠春とお見合いじゃ！」とぬかしていましたからね。

俺個人的にはなにかいけ好かないのであの偵察部隊を追い返しましょう。

潰す撤回。追い返す伝言付きで。

木刀に妖力を通す。

「魔法の射手光の10矢！！」

妖力を通した時にかすかにもれた妖力を感知しましたが、手練れです。すね。

ガガガガンッ！！！！！！

自分に当たる最低限の数だけたたき落とす。

「なっ！！」

叩き落したことに相手が動揺する。

その隙に縮地で相手が密集しているなかに飛び込む。

スタン。

相手全員縮地にきずいていないのかまだ前を見ている。
今のうちに！

相手の腹めがけて木刀を振る。

パリーン！！！！

一瞬だけ魔法障壁に阻まれたが、魔法障壁は崩れ去り腹にクリーンヒットする。

「ガッ！？」

その衝撃でその一人は仲間一人を巻き込んで吹き飛び、木にあたり気絶。

「「「！？」」」

その音でやっと銀がどこにいたのかを残りがきずくが遅かった。

銀の木刀は一瞬で魔法障壁を貫通し次々に沈めて言った。
そして最後の一人。

「誰の差し金ですか？」

相手の喉に木刀を突きつける。

「ああああ！！こ、近衛、、この、、近右衛門だ！！」

男はヒステリックに叫びながら依頼者の名前を言う。

予想的ですね。

ああ、思い出したら怒りが。

プルプル。

銀の体が震えだす。

「ヒッ、ヒイイイ!!」

その震えに過剰反応して悲鳴を挙げる。

あ、忘れてました。

首に押し付けていた木刀をそらす。

「え」

「さてと、あなた達は逃がします。分かりますか？」

「!?! あ、はい!!」

ブンブンと首を振る。

「しかし一つ頼まれてくれますか？」

できるだけ優しく笑顔で言う。

相手からすると極悪の笑顔なのだが。

首を振って肯定の意思をしめす。

懐から前もって用意していた手紙を取り出す。

「ではこれを近衛近右衛門に届けてもらえますか？」

わなわなと震える手で受け取り首を振る。

「では、もうあなた達に用は無いので帰ってください」

銀はそう言葉を言い残すと来た時と同じように帰っていった。

「おお、詠春早いすね」

場所は戻り銀は詠春を遠くから見ていた。

時折はあ！やたあ！などの詠春掛け声BGMを3時間程度聞いていると最後の一体をしとめてしまったので近くに帰ろうとしていた所だ。

シュタツ。

「詠春お疲れ様」

横に降り詠春の頭をなでる。

「ハア ハア 銀様どこにいかれてたのですか」

息を整えながらたずねてくる。

「鼠退治」

「ハア　そうですか」

それ以上は追求してこなかった。

「以外と早く終わりましたね、後1時間ぐらいかかると思っていました
たが」

「いえ、途中から鬼達の動きに馴れて早く動けたので自分でも驚く
程です」

うん、天才ですね。

「どうでしたかこの修業は？」

「きつかったけど自分が成長したことが実感できました」

「なら明日はこの一段階上の鬼と修業ですね」

「ええ！それはないですよ！！！」

「男に二言はありませんよ？」

「僕は言ってます！言ったのは銀様です！！」

「しーりません！」

逃げるが勝ち、即退散で！
銀は姿をくらました。

「え、チヨツ！銀様—————！！」

悲しき詠春の声が茜色の景色にこだました。

一方その夜。

「近右衛門様！」

ガタン！！

「な、なんじゃいきなり！」

今日銀に伸された男が近右衛門に押しかけてきた。

「依頼内容は青山詠春の偵察、危険度〇と書いてあるのに何である強い奴がいるんですか！！」

ものすごい形相で攻め寄ってくる。

一瞬近右衛門は何のことか分からなかったがすぐにある人物に思い当たる。

「ふえ！？ああ、白燈銀じゃな」

「どいつでもいいですが明らかに依頼違反なので料金は弾ませて貰いますよ！それとそいつからの手紙です！」

ダン！！

と強引に机にたたきつけ近右衛門に何も言わせず部屋を出て行った。

「予想外じゃったのお」

銀は無視するだろうと踏んでいた近右衛門は呆氣にとられていた。

「しかし手紙があるとは、みて見るかの」

手紙を開封し中の文章を読む。

するといっきに顔が青ざめ電話に手を伸ばしあるダイヤルにかける。

「わしじゃ！第二軍の派遣は中止じゃ！！分かったな！！」

かなり焦ってそう告げると電話をきりガタガタと振るえ狸寝入りをした。

ちなみに銀の手紙は、

『次にこのような部隊を送ってきたらその長い後頭部をぶった切りますからね』

という内容でつらつらと長く書いてあったそうだ。

・第七時限目（後書き）

感想待ってます！

第八時限目（前書き）

かなり早足で強引で雑です。所要つなぎです。
眠りこけながら仕上げました。すいません

第八時限目

ガアアン！

広い武家屋敷に金属音がこだまする。

「たっあ！」

「ふあゝ」

その武家屋敷のとある一角できり結んでいる男二人。

片や気合の入った黒髪つんつん頭の長髪の青年。

もう片やだるそうに尻から生えた丸のうちの一つを使って青年と見事な切り結びを演じている白髪の男。

「詠春、こんな時間に呼び出すとは　ふあ」

「申し訳ないとはっ！おっと、思っています！」

言わずとも知れずこの二人、青山詠春と白燈銀である。

ちなみに時刻は午前三時、銀は詠春にたたき起こされ寝ぼけ眼で詠春の修業を手伝っている。

「まったく、試験が近いからといってこんな時間によくも俺を起こしてくれましたね」

「い、いや銀様それは木ですよ　」

銀は真剣な面持ちで立派な大木と対面し銀は話しかけていた。

するとハッ！として。

「ん！？詠春いつの間に！！」

「銀様の尻尾は誰と闘っていたんですか！！！」

すると銀は向き直り。

「いやはや、冗談だよ」

「そっちは大岩です！」

ニツコリと笑顔を浮かべて岩に手を置いていた。

銀の目は虚ろとしていて何を写しているのか分からなかった。

そして、詠春の突っ込みと同時に銀の尻尾がただれ、詠春の愛剣が宙を切る。

「ああ！」

ズガン！！

振り切った腕はもう止まらず、その行き先は吸い込まれるかの用に銀の後頭部に物凄い音を立てて直撃した。

バタン。

銀が倒れたのは、詠春がたたき起こしてから15分後のことだった。

三時間後――――

「ふああゝ　又ッ!？」

あ、皆様おはようございます白燈銀です。

後頭部になにやら違和感を感じておる白燈銀です。
驚いている白燈銀です。

なにやら朝起こされたような気もしますが、何時もどつりすがすがしく迎えられたと思ったら吃驚仰天奇天烈摩訶不思議!!

なんと詠春が倒れ掛かるように寝ていたのです!!

ま、まさか詠春あっち系だったとわ　。

「ん、んあゝ」

おっと詠春が目を覚ましたようです。

「あ、銀様おはようございます」

「ああおはよう詠春」

「して、詠春？」

「なんでしょうか？」

「なぜ俺の布団に倒れ掛かるように寝ていたのですか？」

「それはですね、今日試験ではないですか」

今日は詠春の試験である。

内容は父と試合で一本をとるというものである、しかしそれとどう関係が？

「前日に銀様が『俺が朝早くから付き合いますよ』って朝練習の付き合いを申し出てくれましたので、朝起こして連れていった所」

そういえばそんなことがあったような。

「見事に寝ぼけておられて、私の一太刀が後頭部に直撃して銀様が気絶し今まで看病していました」

おう やっぱりですか。

朝は究極的に弱いんですね。

「詠春すまん」

「いえいえ、いいんですよ。朝練習はできませんでしたがそんなことで負ける私ではありませんよ！」

胸の前で手を握り締め、笑顔で言う。

あれですね、お詫びをしましょう！

「詠春、お詫びとしてこれを」

「え？」

それをみて固まってしまった詠春であった。

試験時間――――

「詠春落ち着けば勝てますよ」

「ではいつてきますね」

試験会場となった場所にはたくさんの関係者が集まっていた。

試験会場は正方形となっておりそれを囲むように観客は十分に距離をとって見ている。

そんな中、銀は詠春の背中を押し出し「行って来い」とつけた。

「我が名は青山詠春！！次期長の地位を賭けてここに来た！！！！」

詠春が高々と名乗りを上げる。

「我が名は青山迎春！京都神鳴流長である！その勝負受けてたとう
！！！！」

迎春も負けずに名乗り返す。

両者互いに距離をとり愛刀を構える。

緊張した空気がさらに高まり、ピリピリと肌を刺す。

互いに一呼吸おく。

瞬間に両者が爆ぜた。

詠春、迎春ともに同じ瞬間に瞬動を使い急接近し切りかかる。

胸前でつばぜり合いになり押し返す、そこからは斬撃の押収だった。

詠春が切りかかったと思えば迎春が受け反撃にかかる。又、迎春が切りかかっても同じことだった。

時々出てくる秘技以外にイレギュラーはなかった。

そんなことから数刻。

銀は飽きていた。

正直、こんなもの日々常日頃から見ていますからそんなに珍しいものではないですし何より地味ですね。

そして、迎春が手加減をしているのもバレバレですね。

確かに、年が若い分詠春のほう明らかに技の切れなどが早く迎春を押しています。

しかし、年の功。迎春はそれらを良く見切り、うまくしのいでいます。

これまで何回かはけりをつけることはできたはずですね。

ふーむ、試合の解析も終わったことですし、ちょっと秘密兵器でも出しますか。

銀はこの試合に当たって楽しみにしていた物がある、それは試合前に渡したものである。

ガァァン！！！！

おっと、詠春が吹き飛ばされましたね。
ちょうどいい、

「詠春アレを使いなさい！！」

すると詠春はなにやらカードを取り出た。

「銀様ああ！！！！サセマセンヨオオオ！！」

それをみた迎春は詠春に突っ込む。

「来たれ（アデアット）！」

詠春と突っ込んだ迎春が光に包まれ瞬間に金属同士がぶつかりあう音が響いた。

「お、やりましたね」

銀がニヤリと顔をゆがませる。

光が収まるとそこには刀を振りぬいた詠春と迎春がたっていた。
しかし、詠春の刀は試合前と違い全体的に青く発光していた。
一方、迎春の刀はつばの部分から先の刀身がすっぽりとなくなっており、幾分か離れたところに突き刺さっていた。

光が収まり二人の姿を確認した銀は拍手を起こす。
その拍手はすぐに全体に広がり大喝采になった。

互いに刀をしまう。

詠春は「去れ（アベアット）」と唱え刀はカードに戻る。
迎春は刀身の無い刀を投げ捨てる。

詠春、迎春は互いに近づき握手をし言葉を交わす。

「まさか、銀様と仮契約バクティオーしていたとわな！」

「銀様が朝無理やりですよ」

「刀身を切られては鬨えん、試験は合格だ詠春！」

微笑みながら合格通知を詠春に伝える。

「ありがとうございます！」

詠春も笑顔だ。

拍手が惜しまなく贈られる。

しかし、その拍手はやむことなる。

「銀様ああ！！人の試験に口を挟むとわ！！！！！！」

迎春が怒鳴りながら陰陽札を投げつけてきたからだ。

「狐火！」

しかし、あわてず焼き尽くす。

「銀様！試験に口挟んだ分、分かっていますよね！！」

「ああ、、、」

目の前で怒鳴り散らかす。

「これから詠春を魔法世界に送ります、しかし今魔法世界は戦争状態にあるので銀様にはこの罪滅ぼしに詠春に同行してもらいます！」

「とりつく島もありませんね、しかし任されました」

ふむ、よろしい。などと言い迎春はこの試験の終わりを告げて戻っていた。

その夜、迎春主催で『詠春の長就任お目どう& a m p ;送別会』が盛大に開かれた。

迎春は泥酔し絡みが大変だった。

まあ、なんだかんだで俺と詠春は魔法世界に旅立ったのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5833s/>

ネギま！～白面で白毛な九尾～

2011年7月31日04時07分発行